

J 2.99:4

4 of 20

Dec. 1943

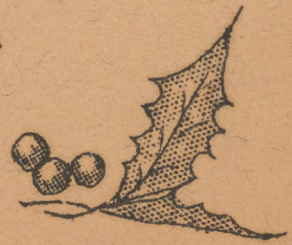
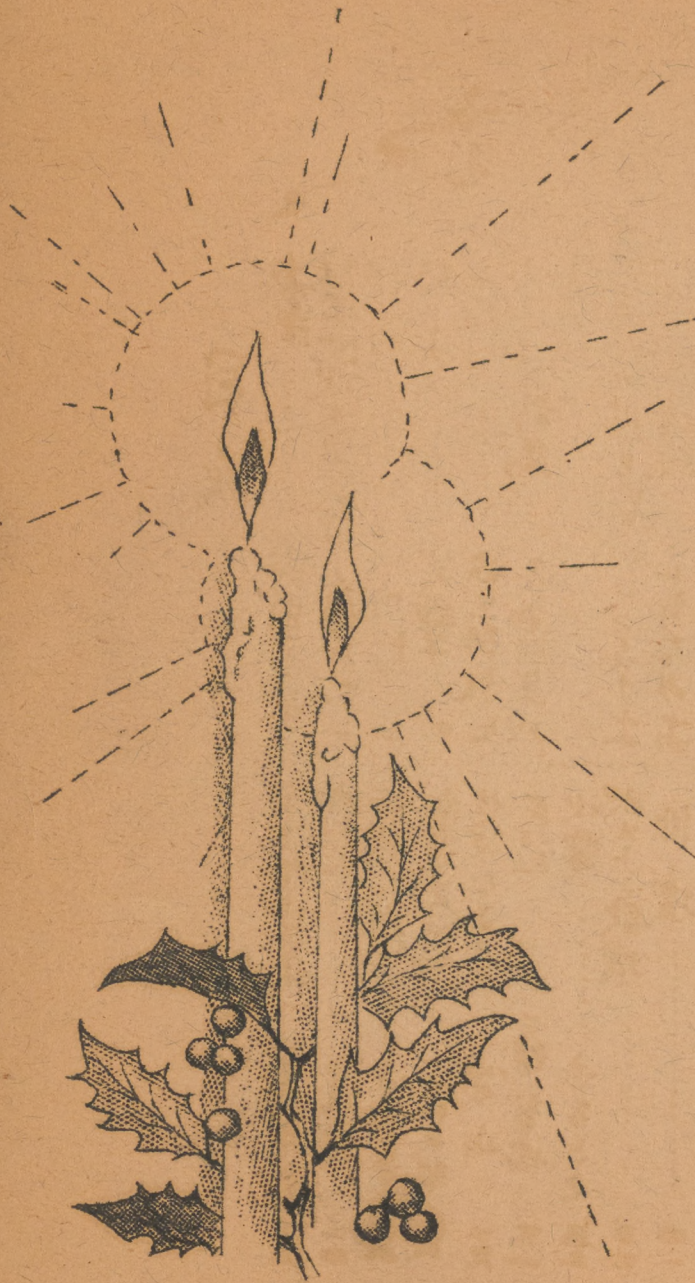
67/14  
C



ホスト

人  
生

十二月





雄辯—沈黙—文章—實行。

くすのせ

シーメンズ事件を利用して在野黨が倒閣の大遊説をした時島田三郎は二時間余に亘つて長廣舌を揮つた。其頃には大石正己は『内閣倒すべし』と大喝した。その討議の言に満堂忽ち喧囂極めた。鎮するを待つて倒閣の劍舌に有りと怒號した。聴衆は總立ちとなり椅子飛び窓破れて多くの負傷者が出た。眞実の言は短い。一つの嘘を信じさせるには百の蛇足を要する。

學習院か乃木さんに實戰談を乞ふた。將軍は靜かに立つて最敬禮した。かなりの時が経つて『私は皆様のお父様お兄様を殺しました。』と聲淚共に謝罪せられた。期待した大講演は只それだけであつた。別室で『一將功成つて万骨枯れる』と揮毫せられた。日本海々戰で全滅した提督も旅順を開け渡したス將軍も兵を諒せず落魄の餘生を送つた。至誠は強い。沈黙は雄辯の兄であらう。

如何に眞理の大雄辯も文となつてはじめて生命がある。尊徳は大説教するよりも一握の夢を作れと戒めた。大隈は一竿の實彈は百千の空砲に勝ると叫んだ。

雄辯は銀、沈黙は金、文は金剛石、實行は太陽と言へよう。





# 目次

表紙	野田夏泉
雄辯沈黙文章実行	くすのせ
野菊	外川明
ひととき	笑紗子
漢詩	古生琴風
若き日の龍馬	長谷川生八
詩	
真理の出づる處	松井ミヅイ
横顔圖説	立野だみ
或日の人生	笑紗子
感謝の合掌	橋本京詩
大セラ	甲陽山人
母子鳥	みどり
アリソナのインデアン	矢形溪山
星を拾ふ子供	山田培郎
實話	迷舟
隨筆「水」	上野進
紅葉山の恋	土居天眼
佐渡なまり	溪山
民謡	天眼蒼逸
吹雪	赤星さと
ホストン歌壇	
俳壇	
川柳	
全添削らん	島原潮風
課題予告	
編輯室	



假令私達がこのまゝ別れつきりになつても、誰かの胸から胸へと永遠に生きてゆくといふことを信じやう。そこに今生死一如の寂光土が見出せるのではないか。

要紙入の中を整理してゐたら、穂草のスケッチが一枚出て来た。去年の夏、或隣人がコロラド河のほとりから移し植えてくれた名も知らぬ草が、真夏の炎暑にも負けずに勢よく伸びて穂を出した姿がすくきに似てゐたので、懐しく思つて一寸スケッチして見たものだが、ホストン文芸誌十一月号の表紙の、野田さんの「すくき」の絵に比較して、余り拙かつたから引續いて捨て、しまつた。素直に、柔く、美しく整つた線は、野田さんの個性をよく表現してゐると思つた。自ら佳いものを書くのも勿論嬉しいことだが、他の人の立派な芸術品に接することも無上の喜悦であり、感謝である。日本畫の大切なことは一線一線を正しく整へ活すこと。生花の生命は花と葉と莖を整へ活すこと。聲樂の上手も一音一言、木を正しく整へ活して唄ふこと。詩もまた一字一句を美しく整へ活すことだ等と考へさせられた。こんな戦時らしくもたない恵まれた静けさに浸つてゐる時、日本の父母から、赤十字社を通しての便りが、七ヶ月かゝつて届いた。親思ふ心にまさる親心をしみぐと感心させられたことである。

一九四三

感謝祭の日に記す。



隨

想

野菊一枝

二

外川

明

病院へ行く路すがら立寄つたと云つて、Aさんが野菊の花  
を少し分けてくれた。朝晩大分寒くなつたが、木炭を必要に  
う作つたのが澤山あるから分けてやるのも云つてくれた。  
し處へ入所するまでは百姓をしてゐたこの人は「髭のない  
本さん」とその地方の人々に云はれてゐたと云ふ。  
誼情素朴で、何時もニコ／＼してゐるこの人に訪ねられて、  
私はその日一日が何となく和やかで嬉しかつた。そして故里  
の思ひ多い野菊の花を一枝、たつた一つだけ持つて移つて來  
た小さな花瓶に投げ入れて、その花瓶の下に鉄刀木のスライス  
を一枚おいたりしながらひとり色々と考えてゐた。  
本不精の私にも、訪ねなければならぬ多くの人々がある。  
何一つ手土産を持たなくもいいから、心から相手の幸福を祈  
りながら、固く握手したい人々がある。  
簡單な葉書一枚でもいいから、達者が否かを尋ねなければなら  
ない友々がある。

雲とへたつ友や雁の生きわかれ  
友よ！別れ別れに生きてゆかなければならぬことば寂しく  
もあるが、お互の胸に培はれた、愛と純情で貫く同じ思想は  
芭蕉



なものが折重つてきて 室息するやうな苦しみにもがいてゐるのであつた。

「何か長いものを書け」と言つて毎月ページをあけて下さるに何も書けないでゐる。

今 戦争を避けて 最も戦争の影響をうけてゐる私共が それに言及しないで書いてゆくことは難かしい。

心の接近した此の生活のなかに居て 必ずしも暖かい心ではかり觀察してゐない自分であることを知つてゐる 辛辣な皮肉と毒をもつてみつめてゐるやうな自分にはげしい嫌惡をするとき 女として 家庭人として生きようとする女がさがあ

ある。 人生の約束をつき破つてゆかうとする自分の情熱の中にも いろいろな矛盾を見出してゐる。

偽らざる心よりけ よく偽善が人生の秩序を守つていつてゐることもある。

言葉にべールをかけたたり 心に扉をつけたたり さうした何か

親しめない物を置く女の性質を 女性の美德と認めながら

にがいものに思ふ自分がすでに 己の赤裸々なものに固ら

れきつてゐる。 心のまうに生きようとする自分がまた

社会の常規の中にはいつてゆかうとする気持ちをもつてゐる

のであつた。

社会といふ まがいた年代に於て築き上げられた人生の秩序



## 笑紗子

静寂の冬枯の林の中に佇んで 私はちつと 枯葉の香りを  
 かぎ乍ら 大地の息づかひと 裸木の憂愁のさゝやきを聞い  
 てゐる。 去年の冬見た同じやうな赤い鳥が 枝の間をわたり  
 いてゐる。 小川の氷底に 白い雲が一つ沈んでゐる。 邑の  
 を向いて たわんだ枝に腰かけると 原っぱで 四匹の小  
 牛と親牛が一匹 草をはんでゐる。 動く度に頸にかけられた  
 鈴が カラン カラン と寂寥と哀愁に満ちたおそい午後の  
 野原に悠長な情緒を展げてゆく。  
 美しい畫中に在つて追想にふけつてゐる私は 冬の憂愁に  
 つままれてゐる自然の中に 新しい生命のいぶきをきいて  
 自然の悠久性をおもつてゐた。 その悠久なるものを想ひなが  
 らも なほ 人間の靈の不滅を思ふことは出来なくて 救は  
 れない憂苦の中に居た。  
 下手くその紡いだ糸のやうに 太い所や 細くて切れさう  
 な所のある 病的な神経が さゝえ切れぬ程の苦悶を脊負  
 つてあえいでゐる。 病的な程 内攻してくるものがある。 激  
 しい想念の中に 戦争とか 文学とか 生活とか さまざま



竹馬の友を偲ぶ

溪山

梨風古生美男 君は余と同郷北備の産也 袖を東西に分  
ちて茲に三十有余歳 戦禍は遂に君を滴して山多辺に居ら  
しむ 適に君が詩索を得、旅情切々相通するものあり  
耳順將に越えんとして 双鬢徒らに霜をふく 想を遠に故山  
に馳せては君と親しく見えて 睦み語らん事を望むや切なり

昭和癸未晚秋 於山多辺 古生梨風作

東別西離極痛傷

南流北敗重星霜

不知何處鷄聲傳

萬里歸心對曙光

山風瑟瑟覺秋冷

原頭爛漫野菊香

丙夜無聲虫寂寞

月懸天宙切望鄉

秋盡孤都草木凋

歲窮謫居旅情寥

不知何時散雲翳

千里老驥待霜朝



とか 既成道德觀念と云ふ高いその塔は し見てゐる人は  
百人が百人まで異つた角度から 異つたレンズを置いて眺め  
てゐるのであつた。私は私で又勝手な所にメーじヤをあて、  
生きてゆかうとするとき、ハツと自分の意久地なさに氣附い  
てひつくりして立ち止つてゐることがある。自分独りで生  
ゐる社会でない以上、社会に定規をあて、生活してゆく  
のが公衆の生き方であると思ひ乍らも さうした觀念に於て  
自分を洗練してゆけないで、ますますよごれてゆく自分を  
厭ひてゐる。

讀んでも 學んでも 結局 分らないのが人生 分らない  
といふことが分つてゐるだけではないでせうかし

こんなことを言つてきた友達があつた。  
何の真理も 掴めず 思想もまたが 漠然とした空虚を頭の  
中人 整理も出来ないう 種々な 悩みを詰め込んで ペンを握つ  
て うん／＼言つてゐる自分が 世にも 惨めに 馬鹿々々し  
い者に思へる。

暫く ちつと 眞面目に悩んで見やう 水が今の私の  
希望。

いろいろ 鞭撻して下さる おちこちのお友達に要領得ない  
言ひわけをしこペンをおきます。



お登美さん、お登美が遠慮なく細いよく透る声で

浩々乎として平沙限りなく

河水縈帶 群山糾紛

風悲一み 日暮れぬ

凜として霜の晨の如し

獸<sup>うし</sup>群<sup>ぐん</sup>を亡<sup>な</sup>ふ

亭長余に告げて曰く

此れ古戰場なり。

ハルカ  
望<sup>ハルカ</sup>にして人を見ず  
黙として憔悴す

蓬断え 草枯水  
鳥飛んで下らず

とすらく読んでゆく時襖が開いて、輝くばかりのお龍の姿が現はれた。龍馬はぎくりとした。

「ホ、何ですわお登美ちゃん、高慢ちきり」と云ひながらしとやかに座ったお龍は両手を突いて「これは坂本様、お出で遊ばしました。」流石の龍馬も悪にかけでは少年も同聊か赤面しなから「やあお龍さんで御座いますか、御機嫌よ此度は又御厄介になりまする。」「だうぞ御緩りと遊ばして下さいまし。」時に今も話して居りまするがどうも見事を書でございます。又余程名文のやうに存じますすがあれは彼処にある岳飛と云ふ人の作で御座いますか。「ホ、岳飛は書いた人で宋の武將で草書の名人であつたそうです。文章を作つたのは唐の李華と云ふ人で御座います。」お龍の何気なしに云つた此一言はさながら利刀の如く龍馬の胸を刺した。龍馬は十九歳にして



若き日の龍馬

8

長谷川生

若し維新後まで生きてゐたら西郷、大久保などと相並んで頭角を頭はしたであらうと想像せらるゝ土州の坂本龍馬と称せられし千葉周作の道場でミツチリ五年、北辰一刀流の剣を磨き、免許皆傳の腕を撫し、つゝ素知らぬ顔で東海道を上り、豫てより懇意な京都の町医者、樗寄家に草鞋をとき、奥の一室で夕餉を済まし、閑散のまゝ、そこにある屏風をよく見ると、石版刷ではあるが、非常に美事を草書の漢詩が張込まれてある。龍馬は之を讀まうと試みたが、彼には少しも救い。そこで恰度そこへ來てゐたお登美と云ふ某家の十四になる娘は戯談まじりに「あなたはあの文字が讀めて？」と訊くと、「え、讀めてよし」と何の難作もなく答へる。「誰に教つたのですか、父さんでせう」といふと「お龍姉さん、龍馬は勘からず驚ろき目、心中に恥ぢた。殊に其教へたと云ふお龍は本年、恐らく十七歳、五年前に彼が江戸へ遊學の途上、立寄つて一目見るより胸を焦がして居る。詩の都に咲ける白百合の花である。今度故郷に錦を飾る途すから京都に足を止めたのも、その月に花の風情を見たさの、暗黙の意志であつたらう。龍馬は何となく親しみを感しながら「では讀んで聞かせて下さい



葬る時がや母の中ほど恐ろしいものはない。自分ばかり山に隠れてから始めて世の中の正体が判ったやうな気がする。宮本さうして龍馬とやらもよく聴け。剣道など云ふ世に全く実用の失せやうとして居る仕事に執着せず、専ら学ぶべきは書にあるぞ。それが世の爲め人の爲になる仕事を暗黙の中に教へてくれるのぢや。俺の一生涯から得た教訓を忘れてくれないと云ふたかと思ふ間に一刀者は颯々乎として雲に飛んで見えなくなつた。武藏は呆然と断崖の上に佇ち盡した。龍馬は不図見下せば脚下の絶壁幾千丈の奔湍、堰かれと飛沫雪の如く、涙みては碧潭龍と渦巻く所、一息冷きつ沈みつ流水ゆく石楠の大輪紅花、美しやと見てゐる内に其花の紅は段々色褪せて青白く遂に龍の顔となつた。あやお龍が流れてゐる、援けねばならぬと身を躍りして深淵に飛び込み、さんとした途端に眼が醒めた。故郷に帰つてからの龍馬は全く人間が一変した。今迄の武藝は忘れたものの如く友人と歓談する時にも剣に就ては再び語らず。暇さへあれば裏の離座敷に懸念の読書に余念がなかつた。彼颯爽と一度に起つや頻りに東奔西走、短命ながら大事業を爲し遂げ、又社会の深淵に泳ぐお龍を救ふて遂に妻とする事に成功した。



國を去るまでに高知で經書の講義など多少聽かされ居  
たがそれはほんの初歩に過ぎなかつた。今遊學幾年、夢寐  
にも忘れ得ない意中の佳人の前に、自分の無學をさらけ出す  
事が身を切らるよりも辛かつた。併し彼はそれを糊塗し  
縫紉して知つたかふりをする程不正直ではなかつた。

龍馬は其夜夢を見た。彼は何時の間にか嘗て一代の劍聖た  
りし宮本武藏に従つて險阻な山中を歩んでゐた。武藏は六  
尺豊かな丈方で又健脚である。龍馬は何だか足がふつ水て  
ある涼しい場所に出た。よく見ると此處は遠州の秋葉山に  
続く龍頭山の中腹で大きい杉や古い松が鬱蒼と繁つてゐる。  
見上ぐると其所にスグと起つ大巖石の上に白髯房々として  
一見神仙の如き老翁が貧乏徳利の口から酒を飲みながら悠  
然と壯大の景色に見とれて居る。武藏はそれを望見すると  
「おい、彼処に我が永年合けん」と探求めてゐる。伊藤一刀斎殿が  
残る水ろしと唄いたかと思ふと既に巖上に拵けて居る。す  
ると不思議にも武藏が挨拶もせまい内に其老翁は「あ  
お前が連れて居るのは誰か。おい坂本か。お前も今は二天一流  
の祖と呼ばれ天下の名人と極印を打たれて居るが、その眼か  
ら見ると未だ若い。世の中は今お前を得意の絶頂に祭り  
上げて居る。併し得意の頂上にある時は聴て世の中が其人を



一つの新しい星がぶら下つてゐる。

確かに今まであの天体は逆轉して居つただらう。その学説を潰さうとして新しいふさなう學者が出た。その運行に備へて止めではならぬ美翼をつくらうと詩人も生れて來た。

では見知らぬ者は

地上の歩きを止めるのがよい。

宇宙の片隅で光つてゐる一つの新しい星は真理しらぬ人間の闘争に攻めて來る。

畢竟人間の生死とは真理への思索に外ない。所が人種は人種としての偏見。國家は國家としての強弱戦——是等誤りの殺戮觀念が教へられてゐる。

もはや我々は

真理への道學者を好まない。

鼻をつまめて間違つた独存主義の偉さを蹴つ飛ばしたい。人道知らぬ愚鈍さ、その縮こしい意氣ぶり——

僕はひそかに真理の出づるところを知る。

あゝ宇宙の片隅で

ボク／＼と生命線を広げてゐる

あの一つの星——





星のふところ

マツイ、シユウスイ

宇宙の片隅で

一つの新しい星がぶら下つてゐる。

天文學者らは争つて望遠鏡の掬れない力に嘆く。その星の小ささに消えられない明い光は宇宙の域外まで流れてゐるやうだ。

僕はひそかにその光を眺めてゐる。

まるで天体の総てが破れて行くやうだ。否、正しい運行に潰されねばならぬ。それが真理だ。

地上の人間は

その小ぼけな光を吹き飛ばさうとした。もはや二年と云ふ歳月に泣いてゐる。消さうとすれば消すほど猛烈な焔に呆れてゐる。あゝ見えれば天体は燃えつゝある。

僕は知らない。

かなき人間らが何を得ようと思ふかを。太陽の光は東から始めて西へ落ちるべきを今もかの昔からを信じてゐる。

宇宙の片隅で



# 或日の人生

笑紗子

朝

キヤンプの朝は——  
哀しい静寂とのんきな夢を破る  
朝餉の鐘のねにあけてゆく

焚火を圍む人の——  
淡い長い影の上に——  
意識しない 惰氣と焦燥が尾を引いてゐる。

晝

白い雲がしきりに旅心を誘ふ。

ハツ手の葉が一つ落ちて、トンボが逃げた。

老爺の語る過去帳が  
倦怠な晝前の空氣に  
哀しい伴奏としてゐる。



横顔圖説

14

若き二世の母に寄せて

立野たぐみ

なにがし

寂日のひかり鏡はれて

春つつましく

片頬染めて立ちどまり

衷心に肌理をもやし

君が愁ひか

プロファイルぬすむ瞳の條理の明り  
ひとめなく乳房に袈裟衣を粧せ

その丘から朔北<sup>キタ</sup>へ展けた

白い効果の赤ん坊の空は著く  
て女花咲く目録砂を彩りて

なにがし

夢をみあげ翳りみおろし

陽炎揺らぐいのちの照る

かつての日の感觸があつた。



# 感謝の合掌

橋本京詩

それは不味いものにもせよ 僕は席についた。

老人は食時に向ふ時感謝の合掌をした。

僕はホロリとした。だが隣の娘達はゲラゲラと笑った。

不思議そうに、そして馬鹿にしたやうに。

僕はホークをおいた、そして考へた。

何故冷笑するか 何故嘲弄するかと。

今の学問は人間を慥巧にしても

精神的なことはちつとも盛つて たいぢやないか

感謝の合掌……それは 古風な習慣かも知れない

迷信的な風習かも知れない

科学を持たなかつた時代の雰囲気から湧いたものかも知れない

しかし僕は

無くする事は淋しい

滅びやうとする事は 惜しく悲しい。

僕は考へる。

それは社会を堅実に維持する上の大きな原素だと。

虐げられたこの生活…… 苦慮をもつこの頃

この思想に徹すれば消えて行くものだ。

だから笑へない。 單純だ、 平凡なことだと。



祝詞を束べられて

16

変に割り切れないものをのみ込んだ兵士の母。

生活の設計図のない空白の青春。

## 夜

星を見てゐる男の想念を去来するは日本の妻

明日を知らぬ野良犬が 社会の破れ窓をのぞいてゐる。

女は概して小さなかくの中で幸福だ。

夜間飛行の赤い灯よー  
穴あいた胸を、自嘲の風が吹いていった。

(一九四三一一二四)



6. 四時を分たず雪と持つ  
峻峰天を摩す處  
昔一噴火の跡なれや  
或は地震の其の跡か  
悽愴峻嶮極みなし。

7. 下瞰は遙か千仞の  
谿底深く秘めし雪  
積り積りつ層を爲し  
氷河と化せし其の態は  
水晶宮にも似たらずや

8. 其の雪解の清冽は  
三百余哩遙る遙と  
羅府の都に注がれて  
一百余萬の蒼生の  
生命の水となるならん。

19

母子鳥

みどり

翼折られた  
母鳥子鳥  
寒い浮世の  
風吹く朝は  
昔恋しと  
泣くだらう

翼折られた  
母鳥子鳥  
辛い浮世の  
雨降る宵は  
かりねの夢も  
ぬれるだらう





18

# 大セラ禮讃の賦

甲陽山人

3. 連峰五百余哩の

蜿々長蛇の陣を敷く  
セラ、ネバタの山脈は  
群蠻三百余座を占め  
人跡未踏の秘地と呼ぶ。

4. 標高萬余の隆起脈

屏風の如く峙ち並ぶ  
原始時代の彫像の  
其の儘残る處女地にて  
鬼神の靈や宿るらん。

5. 自然の巧み神の技

花崗石岩うづ高く  
刻み上げたる峻嶽は  
太古の儘の神祕にて  
人工及び術もなし。

1. 嗚呼大セラヤ大セラヤ

海拔一萬二千呎

蒼空高く聳へ峙つ  
萬古不滅の山容は  
巖然たるよ永劫に

2. 又古く頑たる高山の

豪宕雄偉の莊觀は  
億萬年の其の昔  
大陸創始の其の時の  
巨匠の跡なりや



を意味して居ります。ビマスが歴史記録以前の人種であつて、カサグラニデをクリーゲとゾエブはグラニデの附近に建設し、又はソルトリバーヴェリーの齊址を設立したのも、今人種ではあるまいかと云ふ事は人類學者の間に依然面白き研究の謎として残されて居ります。

ビマス自身の傳説から云ふと彼等は此古代人種の子孫である事を信じて居るやうであります。

最初の探検者が來て、彼等が平和的人種としてゴーン綿、スー、豆、などを耕作してゐるのを發見して以來、ビマスはソルトリバー、サカトニの連絡点であるリバーヴァレーの部分を占有して居ります。パハコスには種々な状態に於てビマスに酷似してをります。が、半遊牧民であつて、一年中ある部分を村で暮らして、あとは移動して殊に夏の季節には自然生る豆類や、果物の採取に出かける様であります。彼等の生活の本據地は、タスコニより南方の土地であります。

マリコパスは、エーマン族の一種族であつて、エーマン種族と同一と信じられて居ります。が、最近の調査によると、彼等は、十六世紀頃よりヒラ平原方面を占據し、今のサカトニの近傍に居住し、ソルトヴァレーの一部分と、ヒラヴァレーのある部分を占有し、ソルトとヒラリバーの連絡点によつて三角形になつて居る今の保護地に、多年住居して居たものと思はれます。勤勉と平和は此人種の特徴として認められて居ります。





# アリゾナのインディアン

## 地形溪山

モハベスはユーマン族の部族でありまして、此一團は、ユーマス、チエメフエヴィヤ其他の種族と合併された種族や又断絶した一部のものも含まれて主として、アリゾナ側にあるコロラド河、ビル、ウィリアムス河の低部に居住し、グラントキャニオンまで延びて居りますが、以前は主として、モハベ郡に居住してゐたものであります。

彼等は他のユーマン族に類似して一般に身体に入れ墨をしてゐるのを多く見受けず。

モハベ人の群族は接近する種族との間に於ける平和は稀であつて肉体的には他のインディアンより秀でて又魅力をもつて居ります。ビマン族は、ビマス、パバガスと今は絶滅したソバイアリスと、メキシコ、それに縁故ある他の種族によつて一團となつて居ります。ピマ人と云ふ言葉は彼等の言語で「否や」を意味し、スパニシの名称であります。彼等自身によりては決して此言葉を使用されません。彼等の言葉では「アーガン」であつて「人民」



「ちや、ホストンが好きなの？」と重ねて訊いた。

「暑いから好きなよ、お父さん」と思ひかけない返事であつた。

「誰かが暑いホストンに、別はしないものは居らぬか。」

「暑いのが好き？」と、稍大きな声で訊き返した。「フニフニ、

スウミニグが出来るから」あゝそうだったのかと、合点が

出来たと同時に、子供の無邪氣な慾望に、ほく笑まう。その

を感じた。続いて彼は「フニグも出来るから」「そうねー」

でもお父ちゃん、は連れて行つてくれないの、独りで行つては

危いと云ふし」と困つた様を表情として居たが、「早くサニアー

が来ればいいな」とつぶやく様に云ひながら、夏が空からで

も降つて来るかの様に、青空を見上げるのであつた。

暫く沈黙がついた。今度は彼の力から、突飛を質問だ。

「おちさんスカイは落ちないの？」「サニも落ちないわー」

「そうスカイは落ちないよ」「サニも落ちないわー」

「サニが落ちてたまるものか」と笑つてると

「デモ、スターは落ちるわー」「ウン、サムタイムス落ちる事がある」

「ミーは沢山スターの落ちるのを見たよ」と云ひつゝ、持つて

居た燃えさしの木の枝で、横に空中へ一文字に、シューツと

切つた。火の粉は飛んで、恰も流星が尾をひくやうだ。彼は

それを右に左に振り続け、流星を联想して、でも居るかに見

えた。「今スターが落ちてくればいいな」と、独り言の様に



## 星を拾ふ子供

梧郎



ポストンの秋の朝は九時にもなれば、もう暖く

なつて朝の焚火に寄る人もめつきり少くなる。

今朝も燃え残りの火に子供が四五人此処に集つて

何かささやいて居るのみである。メスから一番

おそく出る自分はいつものやうに寄り所を此処

に求めて、黙つて彼等の群に入つていつた。暫く火を圍ん

て騒いでゐた子供も一人減り二人去り残つたのは向ひの

ボイルハイトから来た中山さんの政美坊一人となつた。

政美坊はやつと五ツ、それは可愛いボイルである。おどけた

様を顔として物を云ひながらチツと人を見上げる時など

童心の顯けれとでも云ふ様な魅力を瞳に見せて。実にブワッ一

番の愛嬌者である。

彼は三尺余りの細い木の枝を火に突込んで「はー」と音

をたせ、ほつと火が燃え上るのが面白いので、消して

は突込み、消しては突込みして居る。自分は焚火を背にし

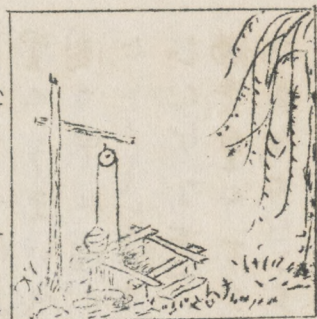
て朝の空を見あげたり、通つて行く學校の生徒や仕事にゆ

く人達を眺めてゐたが不圖政美坊に何か話してみたくなつた。

「政ちゃんはおストンが好き？」即座に彼は

「ミィおストン好き！」と答へた。好奇心にかられて自分は





隨筆  
「水」

上野進月

私がこのポストには第一步を印したのは夏も盛りの沙溪の五月中旬兼陽漸くその姿を没したとは云へ余熱今はほゞめやらす砂塵濛々として息もつきえぬ蒸暑い白暮の頃であつた。炎天下の長途の汽車とバスの旅路に身も心も疲れ果て辛うじて割当てられた宿屋に辿りついた時唯欲するものは他でなく一杯の冷水であつた。手荷物と家の中へ引き摺り込んで急いで外へ出た私はすぐ家のわきに取りつけられた水のパイプを見つけて何か躊躇もなくつかつかと進みよつて栓を一息にひねつてかつぷりと水を口一杯に含んだが次の瞬間思はず咽喉まで通りかゝたがぱつと吐き出してしまつた。何と云ふ塩辛い。生臭い。そうして鉄臭いいやな水であらう。今すでに私はこんなにあかくな味や匂ひのする水を飲んだことは一度もなかつた。ひよつとしたらこの水は長いこと使はれることになしたパイプの中になまつてゐて腐敗しかうてゐたのに違ひないと思つた。そして一ぱらう間そのまゝ水をぬきつばなしにしてゐて新鮮な水の出始めだと思はれる頃まで待ち再び口



自分は「ナゼ？」と訊きたくなった。

24

「デモそしたらスクーを拾つてしまつておいて、今年のクリスマスワリーに附けるの」と云ふ。そして今にも澄み切った蒼空から星が落ちて飛んで来でゐるかの如く、あの可愛い瞳を刮つて見た。清い黒い、アノ瞳は限りなく深い空の神秘に合つて吸ひつけられた如く。

をわり

實話

ミシガン州

清水迷舟

今夏両親に連れられてミネソタ收容所からミシガン州に来た

タム青年。新学期よりミシガン大学

に入學した。所が在学中の白人

學生連がタム青年を支那人と

合意して「日曜日には遊びに来い

」と「夕食は内へ来て食べるやう

に」とか種々好意を示すがタム

青年は「僕は日系米人だ」と云ふ

と件の學生連は本意にしない。

日本人の顔は遠ふと眞面目で云ふ

そうだ。よく聞いて見るとこの

白人學生連はホンチ画で見た以外に、実物の日本人を見た事が無いと云ふ事が分つた。

錦聲先生 大岡周洋作

遠井錦聲節亦美

金石鐸鏗珠玉飛

真個米洲吟詩雄

英風鼓舞同胞來



竹藪の中に走りこむ。そこには山戸屋の井戸と呼ばれてゐる深い大きな井戸があつて、長い棕櫚繩のついた古色蒼然たる釣瓶があり誰が置いたか瀬戸物の茶飲みカッポであつてこの辺の百姓が田の草とりの合間に渴を癒すのに都合よくしてあるのである。却原を木で頑丈に造られてあるその釣瓶は子供の細腕では空でも持上げかねる種重く、それに水一杯入れたら一人の力で引き揚げることが出来ず、私共は靴を投し出し、皆で釣瓶繩にしがみつく。満々と湛えられたその水は釣瓶があちらこちらと中の苔蒸した石畳にあたりと共に水晶を砕いたやうなしぶきとなつて水面に溢れ落ちる。その音が深い井戸に反響してひびくやうとした竹藪の中も私共の罵り騒ぐ声と共に心にこだまする。

一掬の冷水は乾き上つた咽喉を通り胃の腑に落ちこむ。その水のうまさ、冷さ、流汗一時に止り、腹の中もグワッとなくしばしは物も云はず掬つては飲み、飲んでほは掬ひ、息をつかずと三杯四杯と重ねるにつれてやうやく口を開いて口々に水を飲み、あゝ冷い、あゝうまいとお互に顔を見合せて笑ふ。清水で顔を洗つたり汗をふいたりした。もうそれは十数年も昔のことであるけれど私にはまだ昨日今日の様に思はれる。今一度あの清い清い水を掬つて飲んで見たい。殊に水に敏感な私はこのアリソナの水が多分に有機質を含んで硬い水であつたに余計あの山戸屋の水がなつかしうなれない。



をつけたが併し又しても異様な臭気と味とに水は咽喉に通  
らなかつた。私は本當に泣きたくなる程失望した。

水こそは何よりも私共にとつて大事なものであり殊にこ  
んな沙漠の眞只中のこの暑熱にこれから先何年こんな水  
を飲んで生活して行かねばならぬかと思ふもそれではなく  
てさへ立退駭きで気分も高ぶつてゐるし何かにつけていそ  
どほろしく感ぜられるのに又余計に情けなくなつた。  
そのうちにいつしか時が経つにつれて飲み馴れを來て不思  
議とその臭気や異様な味も鼻や口を刺激しなくなつた。  
無論鉄気臭ひのはパイプが古くなるにつれて匂ひも自然に  
取れて來たらしいが併し塩分を多量に含んでゐるのは今も  
以前も同様に感ぜられる。

元來私は渡米して以來まだ一度も美味しい水といふもの  
を飲んだことがないやうに思ふ。南加に居る時にも水に少  
しもうまさといふものがなかつた。それにつけても思ひ出  
されるのは故國で小學校に通つてゐた頃がなつかしい。山  
里のうまい水のことである。山と山とにさしはさされた田  
園の中に稲が青々と尺余に伸び七月の午後の眞白い太陽が  
じり／＼と照うつけて山の松林の中では油蟬がジーン／＼とね  
むねげな声でなき。畦道を傳つて學校より歸へる私共の足を  
猶更重くするのだつたが畦道を山の端まで歩いて來ると急に  
私共はカバンを押へてバタ／＼とかけ出す。鬱蒼と生ひ茂つた



佐渡なまり

後 山

紅葉全集の煙霞療養を読んで終りに佐渡の訛りについて  
教べーが埋められ居る 興味あかきすくに サーはか  
り紹介する事にした。

佐渡の音訛は夕行とラ行とが混同で、夕とあるべきがラ  
にあるから(げた)が(けら)になる。

但し下駄は(げら)を上を濁らずして(けら)と云ふ。故に

己の國と(佐渡)とは云はずして(さろ) 田樂を(れん樂)

(檀風)を(らん風)又は(源の頼光)が(みなもとのだい光)

(太閤秀吉)が(らい周)チツとリルとの音に就ては聞かぬの

であるが、他の各行三音の訛りの甚だしきは意味の解らぬ  
くらひの事がある。

(かんく)はお坊さまといふ事。とんくはそれより下れる称

なれば坊ちゃんにもあつた。意裸の記には(愛子と勘藏)

と云ふとあせり。然ればかんくは勘藏の勘を重ぬたる意

ならんか。同書に(勘藏は甘草なり。甘く育つるといふ義

にや)とあれど、例の馬琴流の解説にて受取り難し。

とんくの義も未だ審かならずれども、己れ案ずるにとんくは

(父)かんくは(母)にて、いづれも幼子の父母と呼ぶ口氣な

るを、彼某者の称に移し用ひしにはあらざるか。



紅葉山人の戀

27

天眠生

明治時代の文豪と呼ばれて一代の盛名を致された、故紅葉山人が生前病氣保養がてら、一時東京の寓居を引払つて佐渡ヶ嶋に移轉し、此所に暫く滞在して靜養を續けて居た頃のこと。計らずも宿の女中との間に戀が成立し病氣の事も打ち忘れ、樂しま日々を送つてゐる間に、病患の方も稍々薄らいで怠りを見せて來たので、そこ／＼に行李を整へて東京に歸らんとせし折、女中は別離の情の忍び難きものやありつらん。忽ち一首の俗謡を作つて山人に與へて自ら慰むる所ありしと云ふ。其の歌の文句は次の如きものなり。が、唯一片の俗謡に過ぎざれど、其の中には女中が渾身の愛情を吐露せる盡きせぬ名残を宿せるものありて、一読者の情の油然として興らざるを得ざるものが含まれてゐるのである。

送りましよとて濱まで出たが

泣けて去らばが言へなんだ



民謡

天眠戯作

一  
嵐吹き捲く沙漠の中で  
すみれ咲くとほしほらしい

二  
何とくよく事局に慥む  
神の世界を見て暮せ

三  
咲いた椿になぜ雨ふらす  
雨が強けりや花が散る

四  
出所―やうか此ホストこそ  
外ぢや花咲く事もある

五  
逢いた見えた焦れちやるれど  
君は東都で大学を這い

六  
書生々と馬鹿にはするな  
父は議会で議長さん

俚謡四調(戀)

蒼逸

一  
もげぐすいとこ女も川へ  
戀をつろつか鯉をうで

二  
惚れた同志か袋と杖が  
ぶかり／＼と小春日に

三  
人は多いし天氣も可いに  
ちやに淋しいもげぐやう

四  
鬢のほつれ毛搔きあげながら  
唄ぶ戦線 月の窓

五  
あの娘愛しや日傘の影で  
ニツコと笑ひ振りほる

六  
月か鏡で秋風若しも  
訃傳へてくれたなら



びいは汎く中より其以上の稱にして猶敬してはびいさんとも  
 云ひ、びい又は(びやん)は中流に印して自ら親しき意も  
 あり。びいは美人の轉語なりとの馬琴の註は夏海の説か。  
 さまさん士分の娘に限りて、是も年少なれば、びいさんなり。  
 びいたは割木、あぐち(胡坐)ねまるは(坐る)かつたには  
 とうもと云ふ事。だつちあかんは(埒明かん)にとうとゞの混同  
 なり。旦那とりふ事を(とうさん)其配偶を(かゝさん)。  
 長袖に限りて(旦那)といふ。其室をぢやろさん(女將さん)。其  
 家の母をおかみさん他にありては(ばばさん)又は(ばばやん)。  
 おぢさん又はおぢやんは其夫。とっさんの一段下がおやさん  
 かあさん。その下がたんさん。うめさん。其又下がだん。うめ  
 うめは母といふ意にて其乳を子のうめと云ふより出で  
 ちうとの説あり。東京にておかみさんと軽く呼ぶは、うめ  
 さんと呼ぶ。賤しきもの其夫さんとさんと呼ぶ。中位にては  
 子供、父を、ちやん。母をちやん。下流はだんやん。かやん。  
 東京(茶まが)「茶釜」京坂の(おもろい)「面白」の類は  
 〇かだら(身鉢)〇さうれん(葬禮)〇ほてきさん(佛)  
 〇かぢわら(輕業)〇つづれ(釣瓶)〇まごとこ(間男)  
 〇びぢやろ(打遣)〇ほいちやう(庖丁)〇わらんじよ(草鞋)  
 〇まみや(眉毛)〇けり(下駄)〇おとろしい(おそろしい)  
 〇くらすけろ(打つ事)〇かたねろ(かたげる)〇ちびたい(冷い)



ホストンの夏の午後、キャンテンの前を通るとシェーヴアイスを食べ  
ては暫しの暑さを忘れたのであつたが、この雪をホストンの  
歌会やメスホルルのテールの上に並べたら、どんなに、  
雪は國境を超越した純であり、美である。日は落れたが降  
る雪はながく、に止まない。今晚ふり続いたらどんなに積  
むだらう。

白妙に積る雪は、我身なれ降りにし、上にも又も降りつつ。

この家のパティといふ娘さんはハイスクールの一年生、まるで  
サニタクロースの様な身ぶり、毎日学校へ行く。自分の十  
歳の時、叔母さんのうちへ、毛糸の肩掛を造るのを習  
ひ、雪のキラキラ降る中を傘を支へて通つた事を思ひ  
出す。其肩掛は二十年前、母がキープして暖いからと云つて  
夜の肩すけにしてゐた事を思ひ出した。

此地方の住宅はベイスメントが廣くて、洗濯物の干場や、物置。  
休むのにエアコンデッショニングの装置等がある。寒さよけの爲  
めに、窓は二重硝子と冬季は用ひてゐる。この窓から眺  
る雪景色は又素敵である。ほんとに歌会の人たちにお目  
にかけていたいと思ふ。そして席題として皆さんが泳いだらう  
立派な作品が拝見出来る事だらうな、雪を眺めて考へた事であつた  
ちらちらと降り来る雪を眺めろ

君と語りまし、ネブラスカの郷



## 吹雪

オマハにと

赤星さんと



朝まだき窓を開けば白妙に  
松の梢に雪は降りつゝ

界で驚きの瞳を見張らせた。庭も樹も椅子も、パピーのペン  
も、何処が道やら、畑やら見わけがつかぬ眺め、遙かの森  
の空をわすめ行く飛行機も銀の翼を光らせて居る。  
主人が長いホークで雪を計ったら五時許り積んでゐる。

雪の朝ニの字ニの字の下駄の跡  
雪の朝あれも人の子樽ひろむ

雪の俳句を思ひ出す。早速子供等に初雪の電話をかけよう  
思ふ内に、向ふからかいつて来た。降れてから始めての  
降雪は彼等に此上もなく珍らしいものであつた。ギヤスリン  
の統制で外出の出来ないうちが残念である。雪が如く白い  
といふテールブルクロースも、白い壁、白い戸棚、白人の顔  
までがうす黒く見えて若い娘さん達もこの雪の白にはお化  
粧を厚くする必要があると思ふ。だか眞眉近くなると雪の  
白さが反射して、又異様に空をあかるくするものである。



白菊も香たこゝろにほへ妹と背のえにしを契るけふの佳き日に、  
さやかなる朝の路をいでゆけば、白鷺む水で舞ひ下る見ゆ  
ゆくりなく今日のむしろに相見てし友と故郷を偲ぶ語りぬ。

貴家しより子

子等のためといふよりをうて遂に遇へるこの境涯は敵國の民。

その憂さに心とがりて思ほへばこゝの生活のいやいまいまし。

雲間浅水條を照らす陽の光り朝の天空に輝き渡る。

在ネブラスカ

赤星さにと

見る間にも夕立雲はおほひ來て沙漠に雨のといろきにけり。  
イニデアンがほろしえが珍らしみこゝの記念に吾が求めけり。

清時文子

無花果の落葉する音カサコリと靴音に似てさびしかりけり。  
會堂と飾り終へたる指先きに沁みて残れる菊の香すがし。

児玉なと

贈びましうウルレーキの貝細くあな珍しやとおもひ愛しむも。

ネブラスカの雪だより見て思ふかな吾れも幾年雪見ずてあり。

二年を圓心の中に住める間も戦況はひたすらに展けゆくらし。

雪の給を入れこといさし便り見れば娘が住むあたうを身近かに感ず。

年田静子

生計のうれひはなけれ收容所におてなごかくまぐに物の淋しき。

寒々と夕べ風吹けば庭の榆しるく病葉を土に散らす也。





ポス  
ト  
ン

歌

壇

34

文藝協會第十五回歌會詠草集

順

十月廿八日催ス

序 不 同

綾 織 謙 介

サーチライトの投ぐる光りに照らされて驚き乱る雁の群見ゆ  
疾風吹く日は慌しわが心落着かぬまゝ今日も暮れむとす

十月四日夜の事件に因し戒嚴令布かる

寂靜まる頃に轍のひびきは戦車なりしぞ明けて知りたり  
事毎に心尖りと相對ふ彼我の態度に誤りはありぬ

榎 岩 千代子

次々に此處を離りゆく歌友思へば逢ひし喜びは東の間なりし  
それこれに異なる性を持つ吾子を扱ひかねて時に泣かゆも  
列なめて渡れる雁を見てあればさすらふものは親一かりける

西 本 まき子

くろなき此の戦ふに親と子の思ひを異になすはさびしき  
ためみなく教への道は心と筋に守り行くべし歩み遅くとわ

阿 部 秋 野



安高きち

試練パークの丸本組みたる新しき橋あたりけり思ひそぐろに。  
エヤメール何ぞとよめば子は雪のつみし景色をたうへてかけり。

永瀬 高力

茄子漬けのうまきに茶漬食ひすぎて苦いと言はぐ人の笑はむ。  
外映画見つしあればあらがわの土よう夜は冷えそめにけり。

### 後記

急に寒さが加はつたせいかな殆ど戸毎に風邪ひきがあるらしい。  
歌友の中にも安高貴友の西氏が引籠り中との由で、今日の歌  
会にも出席なかった。尚ほ他にも罹病してゐる方があるかと思ふ  
が、さういふ方々は充ち注意されて、此上の病勢悪化を防ぎ、一  
日も早く快癒のほう東らん事を祈念してゐる次第である。

さて選歌は安高さんの受持ちであるが前述の如く氏は恙であ  
られる為め止むを得ず又愚生が代理することになった。宣敷  
く歌友諸君の御諒承を乞ふ。作品は許す限り原作のまゝを發表  
する様つとめたが中には加筆して姿の変わったものもある。常に言  
ふ事であるが加筆されたからとてそろしなげなればならぬと言  
ふのではない。唯其れによつて、何か作者が新たにヒントを得て  
次に成す作の上に是を應用するれば幸ひであると思ふのである。  
尚ほ加筆しやうにも、あまり空想的で手の附けられなかつた作もあり  
それは其すゝ止むを得ず發表して置いたことも諒とされ度い。  
終りに諸君の健康と精進とを念じつゝ此のペンを擱く。

永瀬生



旋風立ち黄に湧き上る砂煙火事かと思ひ佇ちて吾が見つ。  
 曇り夜に宿妻はしるたまゆらと遠山暗らく影に浮き見ゆ。

土田親良  
 池田愛子

肌寒むみ焚火につどふ翁等の笑ひ声透る朝のしじまに  
 スエター編む心樂しもくばくも冷ゆる指先を息にぬくあつつ

清水八重子

田常より祈り足らざる吾れなりど母の平處を切に祈るも。  
 うつし急の母の面わの懐しく見つつしをりて涙落ちたり。  
 母は吾れを遠くアメリカに嫁がせて病みす時は悔ひてぬまさむ。  
 悠一みは山嵐の如くおそふ事ぬ大声あげて泣かまほしけれ

古川記南

ホストンの配所に雨の晴れて今朝黄金稻穂の故郷老しき。  
 秋風の立ちて配所に雨の音盡きぬ思ひに吾れ涙しぬ。

宮村一雄

しまし間の命いとしも白蝶はあやふく舞へり秋風の中に。  
 暮告ぐる鐘の音きこゆ荒園に蝶はむくろとなりておむれる。

柳本錦子

今更あたり着きしならむと旅行きし娘の上僂びてたに着れたり。  
 こまぐいと吾娘の便りは身に近く語る念ひと心足らへり。  
 さやざつ一本梢の本の実あさりぬしすいめら去りて静もる夕べ。



今朝として洗濯物はやににてあだかも濃き糊つけしごと。

右の二首は連作であるが、何うもこれだけでは未だ出来上つてゐないと思ふ。先づ第一首目の作、よゝ洗濯しは言はずも！

と思ふ。それよりも何故指先がづく／＼うづくが、其方をとつと、  
際と言ひ現はすべきではなからうか。次に第二首目の今朝、

し。いとやうにいとといふところは、時間的の錯誤を感ずる。それからあだかも濃き糊つけしごとは、何を言はむとしてゐるのか

全く解説に困る。此の歌のメインポイントは其処にあるうだから、其処とはつうと具象的に描き上げるべきだと思ふ。

~~■~~園はれど憂ひき生活早や今年余ホストニケ原園に家並に。日に夜に憂ひき重ぬる吾が子等に、樹の生活の環境思ひて。

此の作者のものは、今更すでにも時々見て来たが、何うも是といふ作品はゆきあたらなうで、甚だ淋しく思つてゐる者がある。

今更の四首の作にして、加筆の施しやうがなかつた。此処に上げた右二首も、唯三十一文字を短歌の様に羅列しただけである。

と言つても過言ではなうと思ふ。作者には表現の上に何か悪い癖がある様に思はれる。先づそれから改め、行かぬばならぬ。

君にはまだいろ／＼話もし度いが限られた紙数で、今はそれも出来な

い。又後日に譲る事にして此稿を閉づる事にする。

右首評と言ふよりも、暴評に終つた様であるが、悪くからず、  
許さる。尚ほ諸兄弟姉の中に愚生の同達つてゐる点にお氣づ  
きの二りがあるならば、遠慮なく御叱咤を乞ふ者である。 永瀬 4



選後隨錄

38

▲食料配給車隊のあとを武裝車嚴しく護り廻り走る

右の一首、あまりにも説明がかり過ぎる。作者の感と云ふものは何処にも現はれてゐない。作者は忠実に対象の描写に努めてゐるところは同情出来るが、歌はもう一步、これより奥にあるのではなからうか。つまり作者が描き上げてゐる此の情景を見て何を感じたか、其処を確り把握して全力を傾けて詠ひ上げるべきだつたと思ふ。

▲ねむりえぬこよひ靜かに起すをば寐いささある夜半の靜に

作者の名前は今回始めて見る様に思ふが、投稿一連五首の作品と見て、既にある程度の作歌経験を持つ人なといふ事がわかる。此歌作者自身は何か感じてゐるのであるが、読者にはどうもはつと掴めぬ感みがある。ねむりえぬにしても何故ねむれぬのか未だ言ひ足りないと思ふし、又寐いささあるのこの寐きの主も直接作者に關係のあるものやら、壁對しにきこえて来る隣人のものか、斯ういふところが眞に曖昧で一首全体が薄霧にでもつゝまはれてゐるやうな感がある。思ふに作者は感の充分に熟し切らぬ中に作を成す方を急いだ爲め、斯様な抽象的な表現に脱してしまつたのであらう。これはかりでなく他の四首の作に對しても同様な事が言へる。いまだ少し具象的な表現を心かけられたら良くなると思ふ。

▲よべ洗ひし洗濯物を干し花は我が指の先きづくづくうづく。





# 俳壇

ホストン俳壇四季雜詠

和氣湖月編

閑 五 松

父と子の話題も稀や秋暮る  
泳場の櫓傾き秋長ける

町近く野馬過ぎ行くや月下絃  
ダハム巻く手を吹けり秋の風

栗鼠のごと娘の素早やさばれボール  
避難せる家具に人出たお事かなし

朝寒むの水涕吸り老農夫

行く秋をなごむはうから慰問劇  
瞑想と神の意識りぬ秋の声

吉 田 竜 耳

堀川の水の淀みや草の花

散る木の葉蝶に紛れて流れけり

流れつぐ木の葉は川の如きかな

41

山火焼き公羽ふぶき水し顔に交りけり

消炭を干して小箱に積みにつけり

アリゾナの陽は猶強し大根干す

陽を返す真砂の原や冬めくし

ソコばくの用途救へ十二日

干からぐし汝後の中の柳茸

た よ 女

朝寒や小猫泣き泣き蹠いて居る

顔洗ふ井の水温し霜の朝

た一つ残る鶏頭霜しとど

小鳥群る穂草の茂る枯野原

陽たまりに髪すく楓や菊はこる

木枯しやとざりし銀のおと



(十月の遺補)

40

安高きち記す

これからは、餘白があまりなりました場合は、過ぐる年、改造社に於て窪田空穂、與謝野晶子、佐々木信綱、尾上柴舟、大田水穂、釋退空、土岐善磨、青藤茂吉、北原白秋、前田夕暮等の大先生方の選に依つてものされた新万葉集の中から佳いと思ふました作を書いて見たいと思ひます。

阿賀 二 卷

二人入る今宵の風呂したのしくて兄が洗ふを我見つゝ居り。

阿澄 一 三

くらき土間に妻帰へう事ぬ音たてゝたためる傘の凍てつけろらし。

留學の志立て日程を誌したる古き地圖出でて来ぬ。

時雨ふる大原みちをはろか来つ障子を開めて小さき寺あり。

阿部 日見

轉任の命をうけて上海へ渡る

さかのぼる河の岸べに波たしそなびのふ草や夏ふけにけり。

海の上

雷深くほのかに鐘の音きこゆいまゝあひて船のゐろらし。

ひた押しにおしあまれるうわり浪ふろき波面にしづけし陽の光り



書を伏せ見返へる窓や月魄し  
忠不忠隔離の日や雁来紅

関 五 松

棉の桃抱いて小猫まうげ  
白菊の壇に教師は聖書説く  
子の學ぶ灯に開き寄る句集哉

小 林 千 代

枯野道土運ぶ栗鼠 此方と向く  
枯枝に蜘蛛の團瑛り秋の風  
晩秋や試作の箱は実りたる

山 本 延 篤

灌漑の人の動きや夜寒の灯  
懶ふけ子、瞳の子となりし夜學のな

山 根 愚 公

秋雲のひまふ映へて飛機の翼  
子の夜學子母は夜なぐの手描きし

安 川 不 似 郎

蹤りて来る犬に口笛秋野行く  
夜學の見此頃和文日記書く  
児は日語親は英語の夜學空

山 名 橋 生

吹く風に飛ぶ枯葉も雀も

田 中 白 水

焚火して静かに運命待ちにけり  
二色に芭麻花や庵の軒

小 夏 眞 人

梟や病み死る吾れが夢浅き  
鳴りやめ々尾をピンと撥ね枝の百舌

和 氣 湖 月

ホストに過ぎ行く日救賜の賛  
鵲の賛調らぶしさまに觸れを兄し  
紅葉牡丹咲くもへず野の冬たれや  
掠め瓜洗ひもあへず喰うべけれ  
野外劇とぞ行く秋を惜みけり



鉄條の張り廻されし煖爐かな  
鉄柵に斯く佇みされし煖爐かな  
大焚火立ち木且つ伐り且つ運び  
小春日や尾に次ぐ牛の列長し。  
顔と尾に寒せ令ふ馬や小春牧  
アトビルの小春や星條旗は垂れ下り  
冬木根にわう々突如とまうけり  
高々と茎擡いでて大根烟  
江に及ぶ葦の穂繁や浮寐鳥

モハベ読十月号拔華

ソートレーキ

左右本舞城

一片の雲よごれせず天  
秋の蝶まがく木をる目に清し  
秋の蝶美しけしはあけれなり  
秋の風和アラン並木に東てはけり

五十住静遊

秋晴れを空の要塞高からず。

爽やかな木葉区一の練習機  
雲表に燕の如し偵察機  
行く秋やちんまうとそが子の艶

小田華泉

秋晴れ時つ山のたぐずまい  
水の面を交ひ蜻蛉の打ち続く  
唐胡麻の實にすす紅や秋晴る、  
窓透れる灯は夜學字の一間かな

篠田香虎

野外劇果て静けき星月夜  
行秋や空席多きメスの白干  
老なて尚録書とたよりの夜興かな

小島静居

水面に浮ぶ柳絮の走りたつ  
首がげがげは又蜻蛉廻つ  
青板に師の影たき、夜學かな

楠瀬赤城

筆洗ふ夜水冷たし遠き日



第九十二回

マニザナ吟社例會句抄

當季雜詠

(投句數三百三十七句)

村上 聖山

外套の比留押しだすリニースミク  
食卓にとぐく日さや冬の蠅

颯風に追いつ追はれつ口ピア草  
大風の暮る配所やまらび草  
枕辺に給を散らして風邪の子

安田 北湖

鷹颯つと枯草波の只中へ  
鳴き移るクイルの群や米枯る

烏羽玉の室に笑へる南瓜燈

クリークに落ち重なるぬまらび草  
池掃除して居る老也野分跡

ふろ下 蘇村

菊作る事も覚えてコウキ長

老の身の日向親や冬の蠅

ピーコート着て小包を抱く娘かな

風吹けばいもうはぐみ来するらび草

流れたる星一とすじや夜寒空

望月 奇風

短日や話も来る洗濯場

移り来て二度の句会やハローウニ

子供等の股ぐらやまらび草

静かなる隣部屋より風邪の声

颯風に揺る煙突氣にしつ

石井 千鳥

何の草枯れたるまに香あり

化けて来て譽められにけりハローウニ

小鬼来て菓子をおだるハローウニ

旅立ちし友が遺愛の葉咲きぬ

田中 素風

南瓜燈大口開いて笑ひ飛り

洗濯やコートに付ふ冬の蠅

追いかけて娘にきせやりぬピーコート

烈風や馬驚かすまらび草

山崎 玻璃女

冬の蠅造る牡丹に動かさる

いと小サき冬の蠅かや飯を盛る

ピーコート並ぶベニヤやアウトレイ

ひさしの書句句会や冬麗



さゝ舟翁還歷祝句

44

マシザナ吟社同人

太平樂並べたつや菊の主

岩下蘇村

紐がたり志かと芽出度き瓢かな

植野桂舟

神よ愛つ事なき鄙の残り菊

村上聖山

還歷の君健かに菊のぢり

土居天眠

軒棚に残る瓢の還しき

山口牧村

菊日和翁のためと云ひつべし

池永肥州

菊の香に翁を祝ふ句會かな

望月奇風

還歷や黄菊白菊咲き映へて

石井千鳥

美男も今は翁や菊の花

安田北湖

著書ともに老ひにし君や菊薫る

木村白嶺

つがなき航路祝はん菊の旨

永井翠敏



# 俳句の概念

山中狸行満述

父の無き子に明るさや今日の月

竹下しづの女

この方は現代女流俳人の鈴々たる人で、先年夫を失はれ女の細腕一つで子供を成人させた女丈夫ともしふ可き九州の人であります。今日の月即ち名月が父の無い子、片親子を明るく照してゐる。たいこれだけが句の表に見える全部でありすが、これと味へば味ふほど深いものがあるのであります。

名月が皎々と無心に遊んでゐる子供を照して居る。がこの明るい月の照すべき人が一人足りず。それはこの子供には父であり自分には夫その人であるといふ亡き夫を思慕するの情懷詢に切なるものがこの一句に溢れてゐるので即座います。僅か十七字のこの句の傳ふる消息は、幾十言を費して尚余りあるのであります。澤山の金句が残されて居るのであります。

これは詠が少し専門的といふよりは初心者の方には深入し過ぐる傾きがあるかも知れませんが、一通りは話して置かちいと、今更で私がお話致します。或節に皆さんが疑をお持ちにならる憂が有るからであります。それは先刻私は俳



土屋 天 眠

46

田水の節約令や冬早  
風邪の子をいたはる母も風邪の声  
外套に風彩上げし区長かな  
枯草や広き裾野に石まばら

池 永 肥 州

立ち向ふ顔に野分の砂礫  
だぶくのヒーフォトきて肥大漢  
いつしかに草枯れてありハーク道

ヒラ吟社研究会ふ集

池田 さほ子

預けし荷届いて安堵夜長事女  
秋宵の小犬従いて来木匂の宿

石原 規 代

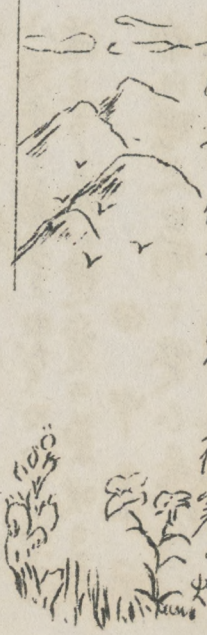
迷ひ猫呼ぶこみにけり秋の宵  
鳴くカコテ今宵は遠き夜長かな

福 山 美 春

一人居の家は明るし秋の宵  
老き夜の木匂の来ぬの果つとなく

永 井 翠 枝

色化けて咲くべや冬早  
短りや子に牛傳はせ濯ぶもの  
お化燈部族の間を小走りに  
吹かぬく我とすらん草とかを  
娘兵て何やら怨一夜寒の灯



十月 二十三日

山中 利子

秋の夜の靴下から降り携りて

山 田 尚 川

秋宵の窓に減れくる毎年慶

雅 賀 花 枝

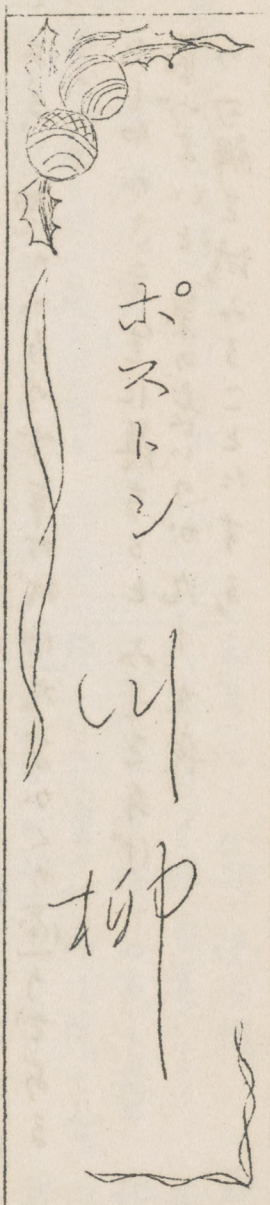
秋の夜の語らふ空に月澄めろ

山 中 理 汀

秋宵やまだ新しき木匂の友

四五人の句座たうしけれ秋灯





古川柳の句解

島原潮風

長歌は大雑刀、短歌はた刀、俳句は九寸五分、川柳は剃刀。剃刀の切れ味は場合次第で長物に優り、川柳の皮肉は長歌や短歌の及ぶ処ではない。只ひとり故事を詠みこんだ川柳となつては、玄人達でその切れ味が一寸解らぬ。爰に浅學菲才を顧みず面白い句を選んで解釈をなし趣味の友の参考とする。

○鶯の巢におちつきし一家中句解

時鳥は鶯の養子と諺にもある通り、鶯の巢に産卵しておいて鶯に孵化され養育される。丁度人の養子となつて扶養されると同様である。今こゝに大名が嗣子がなく死んだ爲めに主従諸共に其家が断絶すべき所、僥倖にも養子（時鳥）が出来たので、そのお蔭で一家中は離散を免れた。即ち居所が定つたといふ意に轉用した面白い句



句は客観一葉張りて主観は絶対禁物である様に申上げました。先づ今の処左様に心得て居て差支へないのであります。うがでは客観即ち何でも彼でも見たその儘を十七字に纏れば事足れりと言ふ訳には参りません。これは俳句となり、これは俳句の素材がないといふ風に取捨識別せなくてはなりません。この取捨識別といふ重要な役目は私が禁物と申しました主観の働きに俟つ他は無ないのであります。たゞそれが句の表面に現はれると鑑賞の余地のない安っぽいもの即ち私共の嫌忌する月並句に墮するものであります。処が主観は句の裏に潜んでゐて、それが味ふことに依つたとと謔み出るといふ風になりますと先刻の「父の無き子」の様な立派な詩も得られるのであります。私は常に思ふ事でありますが、主題は恰も磁石の様なものであります。その中に甘燦然と光輝を放つ黄金（詩）が含まれて居るのであります。たゞ磁石の底では何の価値もないのであります。それとくらゐシャープで碎き熔磁爐に入ると吹き分けて色々人々を加へて漸く数噸もある磁石から僅か数匁か幾らかの黄金が採れるのであります。そのクランプや熔磁爐の働きが俳句の場合主観であります。新物混々といふよりは新物だらけの中の僅か百千分の一の詩を見出すのは、たゞ眼に映じた其儘を字生すれば事足れりと陽氣に構へて居るは夢にも得られぬ事であります。この雜物と取除けて詩を見出す働を主観の燃焼と稱して居ます。



第十回紙上互選句抄 十月三日

入 課 題 「 雲 」 互 選

- |    |                |    |
|----|----------------|----|
| 10 | 雲行と妻と見て居る洗濯    | 緑泉 |
| 9  | 青雲の望みもあつた古日記   | 楓水 |
| 8  | 雨雲へまだ帰らぬ幼組園    | 胡仙 |
| 7  | 雲の色明日は雨とさめを寐る  | 泣水 |
| 6  | 行く雲へ我が環境さうほう   | 守平 |
| 5  | 戦雲が何時までも続く俺の年齢 | 閑水 |
| 4  | 震繁期日和氣になる雲の色   | 時子 |
| 3  | 雲行が旅出の朝と鈍る     | 光葉 |
| 2  | 朝焼の雲へ思案の旅仕度    | 凡才 |
| 1  | ありあけのあたし懐し先住地  | 露光 |
| 0  | 黒雲を割る一線の雨より    | 藤枝 |
| -1 | 夕焼の雲へ嬉し握り飯     | 泣水 |
| -2 | 雲行を知つて駭ぐ雨蛙     | 溪山 |
| -3 | 日向ぼこ雨雲の流しわが生活  | 三木 |
| -4 | 汽車の窓を荒野がつく雲の色  | 虎山 |
| -5 | 雲掴む活がもてる夜の長さ   | 露馬 |
| -6 | 雲一つ見えぬ静かな秋の空   | 牧東 |
| -7 | 雨雲へ母が元になる子より   | 五松 |
| -8 | 夕立ち雲間ほつき虹が立ち   | 醒水 |

51

- |     |                |    |
|-----|----------------|----|
| 6   | 雨雲へ忙し今朝の洗濯場    | 静枝 |
| 5   | 断雲と縫つて爆音遠ざかり   | 丘上 |
| 4   | ちぎれ雲筆に描けぬ色を見せ  | 狂月 |
| 3   | 寂ろんで雲へ行衛と追つて見る | 三木 |
| 2   | 散雲が吞んだ明日風へ抜け   | 耕一 |
| 1   | 早天にまた降り足らぬ雲の切れ | 如骨 |
| 0   | 宿妻の消しこは見える雲の山岸 | 白舟 |
| -1  | 旅の町でこれい雲の事も書さ  | 桂甫 |
| -2  | 戦雲の晴れる世界の春を待ち  | 青雲 |
| -3  | 雲行と氣にする母の旅枕    | 流天 |
| -4  | 月さかす何処へ行ふらうと雲  | 緑泉 |
| -5  | 一皮の雲ちぎ空を赤蜻蛉    | 閑水 |
| -6  | 行く人も雲も忙し浪浪風    | 五色 |
| -7  | 夏雲へ巨人的港を思ふがかり  | 三木 |
| -8  | 雲間減る月へ冷たい秋の風   | 時子 |
| -9  | 雨雲の迷はす今日の釣足    | 子守 |
| -10 | 白雲と静に流す山り池     | 踏舟 |
| -11 | 急列車雲へ消えぬ大平原    | 胡仙 |
| -12 | 麗人の踵と踏んだ雲の色    | 竜耳 |
| -13 | 千と割る空と自由に白雲    | 桂甫 |
| -14 | 晴天に雲を吐いてる広告機   | 次考 |

三頁以下省略



○すり鉢を伏せて西行たばこにし

50

### 分解

富士山は丁度すり鉢を伏せた形である。今西行は三保の松原ですり鉢の形をした富士の烟を打眺め杖を停りて一服しながらその奇景を賞玩してゐる。此賞観してゐる様を他動的に「すり鉢を伏せて」と露骨に云つたもの。そこに却つて趣があり休んで居るといふべきを（たばこにし）の五文字で感得させる手際は非凡である。

○父母居する中は餅にて食傷し。

### 句解

論語に「父母います時は遠く遊ばず」と云々とあつて、子供の方から父母に心配をかけぬやうにとの注意を述べたもの。これはそれと反對に父母が家に居られる間、即ち存命中は其膝下を離れたることが出来ぬ。従つて茶屋前び、二日酔といふやうな粹な遊びも容易にお出来ない。それ故自宅で餅の食傷といふ甚だ野暮な境遇にあつたものだ。かれもこれも共に孝であるが、前のは積極的の孝で、後のは消極的の孝である。親がかりの少年時代は大方かくの通りである。

次号には

○おしやかさま生れ落ちるとみそをあげ  
○氣づよいと氣の長いのが九十九夜の  
の句解を試みることにする。



鯉はわろコロラド河も秋が来る 紀南  
河向ふ加州と知れば青く見え 青山  
大河の金波銀波が呼ぶ魅力 時子  
川の面見つめて今日も釣に暮れ 子守  
半日は河で送らふ竿を持ち 三木

軸

應考 百三十句

河面の月にも秋のある姿

第廿九田川柳句抄 十月七日

課題「道」 矢形溪山選

天 清水迷舟

地 演口 節水

人 山田如骨

石蹴つて道一バイに子は帰り

客

へっハイカー親指あげて曲角 青山  
無駄足の帰りへ月が喰ひかけ 潮風

裏道を通つて犬に吠えらるる  
道普清今頃は通水ぬ赤うろ  
死々谷の試練へ光る道しるべ

秀

防火道はつきり見える秋の晴

イーストへ招く軌道り太い線

雨後の道とこころに月が住み

同ト道歩いと無事な陽を拝み

三力の歩調は同ト道しるべ

鉄木の杖で日本を歩く夢

反対に行けば加州に続く道

道連水になつて田舎の雨が続き

道端の木は極楽の杖を喰ひ

佳作

キャンデーのセル舗道が狭すぎる

天と地と出合ふとこまで鉄道線

筒抜けに舗道へおけろチャイナ飯

釣れる洲の方へ伸びてる堤の道

墓に買けて帰る夜道に秋を短

セメントの何処まで続く道の中  
行く道ははつきりしてる肛の底  
道を問ひ道を訊かれる旅の町

秀峰 秋風 巴水

大州

秀峯

丘

鏡

鳥城

高羊

鏡水

絹子

次彦

五色

潮風

光葉

牧東

迷舟

凡才 虎山



第三十面川柳句會 十月二十日

課題「河」 島原潮風選

天 富田 虎山

鉄橋のタイムへ量る河の中

地 鈴木 胡仙

月影を碎いて通る川の風

人 篠原 白峯

川の瀬が忘れにる夜の風

客

雲と水連なるあたりの河の中

狂月 虎山

大漁の夢まだ捨てぬ河の昼

禁漁地魚に平和な河の面

鴨緑江唄で笑の船を振り

秀乃 逸

つたと河辺に沿ふて孕み半

河に釣針を見て觸れる自由の

加州のふ名に佇つて見る河の

河一つ越えれば安楽の風が吹き

大河の鯉には狭い庭の池

河向人が住んでる鶏の声

宇平 五松 丘止 まつる 胡仙

残る餌は河に撒いてく釣帰り  
河一つ越えて加州の風にふれ  
幾山河父子隔てゝぬらす袖  
河一つ隔て加州の秋が見え  
河向加州の風に釣を垂れ

佳作

河舟の音が近づく霧の中  
山河を越えてギヤアの風も馴れ  
天の川空にある子に子は不思議  
日曜の河約束は雨となり  
雨の日の心は河に釣道具  
山と河どこか故郷にある美観  
轉位へりも暇に河の四季  
濁流の河も悲しい夏休み  
思出は花火へ更けた河舟  
河風に吹かれて食べる飯味  
大河に誘ひ出されたり日和  
物足らぬ心河辺に釣を垂れ  
河向夕餉の煙の鰯にく水  
一日の慰安逃した太い鯉  
コロラの河に馴染んだ辨当箱  
星空に大きな傷の天の川

浪音 西州 孫六 近葛 溪山 笛水 巴水 秀峯 晚香 高岸 楓水 静女 白舟 迷舟 里江 凡才 大州 如骨 汀村 竜耳 聖水



後近へ椅子と譲る主賓席 露角  
 6 舟の進歩知らずギヤアの長欠伸 狂目  
 皮膚の色不安に思ふ汽車の旅 鏡水  
 進退を悩む配述に秋もたけ 紀南  
 虫の声聞く頃からの飯の味 晩香  
 5 人波を押し分け押して知った顔 一沙  
 進み行く時代へ白髪も汗も拭き 留雄  
 バス進む窓へ名残りの睡がうるみ 鏡水  
 常境にある進取の氣を捨てず 丘上  
 フラクだけ進む夜興も今語り 露角  
 幸不幸覚悟で進む志願兵 緑泉  
 岐の道大さう方へ足が向き 幽香  
 4 進みゆく世相にうとく柵に兵 閑水  
 もう踏みぬ土地か涙の発車ベル 柳華  
 進んでた時計を喰ふ今朝の月 胡仙  
 戦争が殺人機具と近歩させ 泫水  
 近歩する世に負けぬ辞書を借り 一沙  
 進む世を他所にフエスウ中に走ら 太州  
 進みゆく自動車へ母の睡がうるみ 汀村  
 進歩する世に後れず新子引 了る  
 進みゆく時代に遠く收容所 聖水  
 進ませて見たこの子の受け答へ 柳華

以下省略

55

本多華芳  
 村岡鬼堂  
 西先生追悼記念川柳  
 課題「自尊心」  
 前号より続く

濁り江に高く咲いてる蓮の花  
 釜焚きしても乱れぬ髪をきで  
 倫落のすだ捨て切らぬ自尊心  
 自尊心捨てず自尊心日と重ね  
 大衆にこびす給筆は貧に堪へ  
 自尊心にはかはらぬ配給衣  
 已惚も一寸交つた自尊心  
 泰然と見せて家系と貧に飛  
 佳  
 戦局へ沸く三世の自尊心  
 自尊心きづつけら水立ち上り  
 自尊心喧嘩を避ける煙草の輪  
 自尊心高めて今日をみかく秋  
 自尊心柵にもなれる二度の夏  
 先生が次女になつて無口なり  
 幻滅の悲哀を他所に我に生さ  
 自尊心拗ねて世荒野の果に老む  
 露角  
 頑老  
 一水  
 多佳子  
 あき子  
 雀喜  
 汁雪  
 海風  
 筑波  
 都鳥  
 溪山  
 定吉  
 守平  
 虎山  
 不啼鳥  
 溪山

以下次号



友情を嬉しくあとに岐れ道

時子

ハイウエー残して降りてくる雪

桂南

道草へ思ひ出せぬ用ゐり

静子

霜柱踏んで職場へ早出組

高半

求道に入つて素直に詫も云へ

宇平

一〇ー何時帰れるか曰ふ人

まつる

八道と歩めるすゝの裏を屋

楓水

道とすればあふなく橋があり露昌

露昌

田舎道氣に二歩むハイヒール

三木

道端の野草踏まれたまて咲き

胡仙

小道が出来て人道疎くなり

汀村

慈善鍋立てた舗道が広すぎる

竜耳

道草が小さく帰るメスの鐘

春山

横道はもう歩くと過去の傷

凡才

道端の岩手にも咲いた赤い花

静子

長期戦出でから迷ふ安達の道

緑泉

見送りのつかぬ進路へ鳴る汽笛

踏舟

道をゆく一人一人の草不幸

露光

軸

雲行と別に自信のレール道

第九回紙上互選

十一月七

課題「進む」

15	たまさかの逢瀬へ進む腕時計	紫水
14	縁談が進み夜更けの茶の香	重州
13	進まず心移動の汽車に揺れ	大州
12	進退を今ギリ決めて登録紙	紫水
11	進級を嬉ぶ母の手内職	三木
10	進まずてをいってばかり朝寐する	桂南
9	進まずて出来ず淋しく母と住み	高半
8	進むせに取れ残されて貰ひ飯	子宇
7	進む中の義理へ進むぬ顔とたて	三木
6	神前へ進む二人りの軽い足	凡才
5	嫁の口結解るまで気が進み	光葉
4	三輪車後から追へば又走り	時子
3	進む進む負けぬ努力の母若し	藤枝
2	サベゲの半紙進歩の跡が見え	静枝
1	袂別へ進む時間がうらめしい	送舟
	新学期一級進んだ子の鞆	露光
	平和後の進退に聴く子の意見	留研
	今一步進めを流す吐き底	青山
	良いことだ流進んで茶の香	



初歩添削講座

島原潮風

川柳は文芸問題と交渉があるが、本質は協調融合の神ナガウの道で表現せられたるのか川柳であり、思想問題が第一になつてゐるから、此處心して作句せられたい。

△は原句○は添削句 口は旧吟

△我姿見えずに笑ふ人の癖 縁 泉

見えずにが可笑しい。

○我姿見ないで笑ふ人の癖

とでもしたらと思ふが、之でも充分好い句とは思はれぬ。また上手に詠んだからとて此意味の句は余り感心せん。

津村 村

△初孫の笑ふ次女へ歌が伸び  
之で充分とは云はんが判る。然

57

しつそ(姿)をとつて

○初孫の笑ひへ老の歌が伸び  
としたら、一寸ある川柳となる。

中山 吞 風

△晴水姿見送り母の肩があり

「肩があり」では可笑しいから

○晴水姿見送り母の軽い肩

として見たがどうも充分では  
ない。

関の 五 松

△遠くから一度姿見振り送り

○次女見へモ一度帰る晴姿 全

△あの次女見覚えのある紅日傘

此句は紅日傘が主となつて居て  
姿はほんのつけたりのやうで  
あるから

○紅日傘見覚えのあるあの姿

とでもしたら次女が浮く。



席題「淋し」

於十九ノスホール

十二月五日午後

久瀧に淋しく笑ふ友は老ひ

雀村

淋しさを本枯に聞く一人旅

子の旅路泣いて別れる丁の列

緑泉

工場も今日は淋しい日曜日

轉位へ淋しく送る隣組

汀村

慰霊塔淋しく眠る開拓者

本枯の音へ夫待つ窓の月

秋月

淋しき一境へた今日ある遠見の様子

友俣ぶくべ淋しいペニの音

幽香

末っ子の出所淋しい母の目々

囚けれの身へ寂寥の二度の秋

胡仁

亡母の夢さあ淋しい窓の月

雨の音一人淋しい窓に佇ち

里江

監禁の夫へ淋しく待つ二年

小境を墓石に座つて今日も暮れ

牧東

息子うめりへ轉位させぬ独身身

先輩の欠けて淋しい冬句会

竜耳

歯が抜けて淋しく就いた朝の草

失望へ淋しく唄ふセーザ原

青山

収納はすみ杭葉は散うて秋淋し

湖月

イニタの夫へ淋しい二度の年暮

晩香

淋しき一境へつた五丁燭

母と娘へ別を淋しい宿府の灯

後記

後記

句会が在りが十九、三丁を中心になつて居

るのを交互に十九ノスホールで開かせて世間

事にしたが生憎今日のは華道與子枝の修

業式で在りは十五名であつた。

青山氏がわざわざ一ノニキャンブからウ

参加は留ま喜ばせた。

今後亦二、第三と聯合句会の端緒を

開いて世に様に切望する次第である。

ホストの川柳は昨年九月からのクラスで

ある。他の先輩諸君に對しては興味の薄

いものがあるかも知れぬが茲まで来た者や

の川柳曰く「これ感興浅からざるもの」と

覺えるのである。

次回は四丁で句会を開きます。

溪山



# 文藝作品歡迎

創作詩 隨筆 散文  
民謡 其他

毎月廿五日締切

## 短歌

五首まで  
毎月廿日締切

## 俳句 四季雜詠

毎月廿五日締切

## 課題

川柳課題 予告

「吐」三句 山本竹原選

「希望」三句 互選

以上十二月十五日締切

「平凡」三句 溪山選

「隣」三句 互選

以上一月五日締切

「雜詠」三句 石川凡才選

「思ひ出」三句 紙上互選

以上一月十九日締切



## 編輯室

正月六日

朝 六十度

午後 七十五度

夕 七十度

理想は空想に終り計劃は画餅に歸する事が多い。もうとつくに編輯を終つてゐるべきものがやつと今朝ペーザが決つた。モハベは二日には出たと云ふのにヤキモキして来る。一日の實行を怠るものは十年の悔を力こし。モーメントを慰み得ぬものに明日へり極樂世界建設はない。文藝の趣味に生きるものは本質的に藝術の本旨に徹底して機舎を捉へ環境に善處する事が肝要である。テナ事を考へて見つゝ過去をふり返つ



△姿見へ寄り離れつ晴衣の娘

添削は不要 左の句と比較對

照さんたい。

□次女見になるもの女見逃がさず

岡 亜洲

△飾りなき姿込でるしゃわの中

此句はすうしと詠んである

處は好いがしゃわの中の裸姿は  
当り前だから何とか身体美  
の姿でも詠んで見たらどうか。

森岡春山

△後から前から吾娘の嫁姿。

吾娘とせんでもよい。「娘し

たけで詠みよくて判る。

句主は

□嫁姿母は前から後から

と云ふ句があるのを御存じか

原句を損せぬ様に添削するの

は大変六ヶしい。随つて多少

コイツケた様に見えるが之も

致方ないことと思ふ。

で成る可く題と内容に詠みに

む様にして欲しい。

例句

□嫁にいい歳を日本着きせて知り

□顔隠す袖を映画へをうかしみ

□地味な姿だが寄り附は筆頭







Dec. 1943



て「汝一年のレコードを茲に差し出せ」と云はれると流汗三斗より以外にはないだらう。サテ本年も再轉任をめぐつて曲折の多い一年であつたが、ホストの道はよくなり、校舎は新築される。其他日々種々改善される。其道の人々に頭が下る。中に比留さんのお世話になつて文芸人の集うと一回も催し得なかつたまゝに筆は着れてゆく。第三キャンプには此間バザーがあり、第一ウカも一月二月と続けて催しがある。云ふかに。何とかせねばなるまいに、ノレーキに行かれた誌友達は一同何の異状もなく過して居られます。雪が降り、空を雁が飛んで、燈下に見て詩趣を養ふ。何だか二三日行つて見たい。ホストでう氣持ちです。オハロの虎山君、オマハの赤星さん、久しやうの雪と楽しむお手紙つくり、故郷を偲ぶものがあります。

本誌誌友の一人、コロラド州アマチ轉任処にある唐津文夫氏から、外川氏へ便があつて田中、野田、安高、林、吉里、望月、そつ外ホストに同好の友一同へよろしく傳言を頼むとの事でした。致會は十月廿八日予定で開かれ、永瀬氏の有益な批評があつて、毎度ながら川原夫人から茶菓の饗應をうけました。又、次は一月二日の予定であります。各人各々異つた意見のある中、に知名の寄稿家諸士の支持を賜り、読者の数も増加の一途にある事は衷心より感謝の外はありません。同時に自ら其足らざるを恥ぢるものがあります。年改まるに同時に筆硯新らたに一月号に皆さんとお見え致します。終刊に際し諸君の過去の御厚誼を謝し、尚一同のよき幸運の益に加はらん事を切にお祈りして文芸協会同に代り年末の言葉に代え、次号であります。



Boston Poetry Club

Block 46 Hall.

ボストン文藝協会

第四十六区ホー